

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 23 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531116

研究課題名(和文) 中等国語科教材のレトリックへの焦点化による関連型学力・授業モデルの構築とその検証

研究課題名(英文) Construction and inspection of literacy and an instruction model in reading connected with writing focused on rhetoric in teaching materials for the senior high school Japanese curriculum

研究代表者

守田 庸一 (MORITA, Yoichi)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：60325305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、授業分析を中核とした調査の実施とその考察によって、後期中等教育(高等学校段階)の国語科教科書(国語総合・現代文)に掲載されている説明的文章教材におけるレトリックに着目し、読むことの授業における立場性の意識化と立場の往還によって成り立つ、理解と表現の関連型国語学力および授業モデルを構築した。また、構築した関連型国語学力と授業モデルの、国語科教師およびその授業実践に対する有効性を検証した。

研究成果の概要(英文)：We examined literacy and an instruction model in reading connected with writing. We focused on rhetoric in teaching materials for the senior high school Japanese curriculum. Through an analysis of reading classes and other research, we constructed and inspected literacy and an instruction model in reading connected with writing, which is composed of consciousness of positions and shift standpoints in reading classes.

研究分野：国語教育学

キーワード：レトリック 説明的文章教材 関連型学力・授業モデル 高等学校 国語科

1. 研究開始当初の背景

日本の中等教育における国語科授業では、理解力と表現力を切り離し読解に終始した教育を主に行ってきた。学習指導要領や教師の心性に深く根を下ろした「正確に理解する」すなわち明示された情報の再生を学力とみる信念(学力モデル)は、授業実践を規定し、学習者の学力を制限している。言語理解と表現を「リテラシー」という概念で統合的にとらえる国際的な学力調査(PISA)は、その問題を浮き彫りにしたといえる。ところが、理解と表現の能力関連をはかる関連型学力が、後期中等教育(高等学校段階)において理論的にも実践的にもまだ明確になっていなかった。

2. 研究の目的

上記の背景をふまえ、本研究では、後期中等教育における“理解と表現の能力関連をはかる関連型国語学力および授業モデル”を構築するとともに、その有効性を検証することを目的として設定した。具体的には、研究期間において次の研究課題を明らかにすることを目指した。

- (1)後期中等教育の国語科で扱われる教材のうち、特に説明的文章教材におけるレトリック(読者を納得させるための表現方法)に着目して、理解と表現の関連型国語学力および授業モデルを構築する。
- (2)構築した関連型学力と授業モデルの、教師およびその授業実践に対する有効性を検証する。

3. 研究の方法

本研究においては、主に次のような方法によって研究を進めた。

(1)文献調査

研究期間において使用された高等学校国語科教科書(国語総合および現代文)掲載の説明的文章教材(評論教材)について、レトリックに着目しその使用頻度等を調査した。この調査においては、必要に応じて教師用指導書も参照した。

また、OECDの提示したキーコンピテンシーおよび読解リテラシーに関する先行研究を調査し、本研究の位置づけについて検討した。

(2)記述調査

当初は学習者(高校生)を対象とした記述調査を予定していたが、調査用紙作成のための基礎情報が得られなかったことから、下記(3)のインタビュー調査によりそれを補った。

また、現職の教員を対象とした記述調査を実施し、説明的文章教材のレトリックに対する反応や意識を把握し、その学力観や授業観に迫った。

(3)インタビュー調査

現職の教員を対象として、(2)の記述調査では得られない情報を把握するためのインタビューを行った。

(4)授業分析

本研究の中核に位置づけられる調査として、複数の授業を分析した。この調査では、以下のような教師による授業を対象とした。

先進的な授業を継続して実践している、豊かな教職経験を有する教師

既存の授業を乗り越えた新たな実践の創造に意識が向けられている、中堅の教師

国語科授業の改善に課題意識を持つ、初任に近い教師

の教師による授業は、実践の到達点を把握しモデルを仮説的に導出するための先進的な授業(2012年度)の教師による授業は、モデルに応じた実験的な授業(2013年度)

の教師による授業は、モデルの有効性を検証することを意図した授業(2014年度)である。なお、それぞれの教師に対して(3)のインタビュー調査を並行して行った。

4. 研究成果

高等学校の国語科教科書に掲載されている説明的文章教材におけるレトリックは、小学校や中学校の国語科教科書に載っている説明的文章教材においても見ることができる。たとえば対比してものごとを論じることで、それぞれの特徴を明らかにするという述べ方の場合、小学校(1年生)の説明文教材である「どうぶつの赤ちゃん」(光村図書)でも、高等学校(国語総合)の評論文教材である「水の東西」(第一学習社ほか)でも見ることができる。ただし、「どうぶつの赤ちゃん」の場合は「ライオン」と「しまうま」のいずれかの価値を主張するために両者が対比されているわけではない。一方、「水の東西」の場合は、「鹿おどし」と「噴水」のうち、「鹿おどし」に重心が置かれ、そこから日本人の「形なきものを恐れない心の現れ」が導出される。つまり具体的な事象(「鹿おどし」)から抽象的な日本人の内面に迫るといふ論述の中に、「鹿おどし」と「噴水」の対比が組み込まれているのである。筆者は日本人の内面の優位性を認めており、この文章はその立場から論じられている。

こうした小学校から高校にかけての教材のありようから、後期中等教育においては、対比そのものというよりも、筆者がどのような立場からその対比を表現しているのかを明らかにすることが重要となる。つまり、レトリックそのものを読み取るのは重要な行為ではあるが、そこにとどまるのではなく、それを行使した筆者に寄り添ってその立場から行為を分析したり、あるいはそれと読者としての自らの立場との間を往還したりすることが重要であると考えられる。これは表現者と理解者との間を往還するということであり、そこに理解と表現の関連型学力を見いだすことができるのである。記述調査によると、教師は説明的文章教材におけるレトリックに対してその存在価値を認めている。またインタビュー調査でも、初任あるいはそれ

に近い教師であっても、説明的文章教材を読むことの授業において、書くことを意識して学習指導に臨んでいることが明らかになった。ただし、教材の読みを通じて理解と表現の関連型学力を育てようとするのであれば、授業において、立場性の意識化と、立場の往還が学習者にもたらされることが必要となるのである。

以下、立場性の意識化と立場の往還という観点で、本研究で扱った授業についての分析・考察の結果を記す。

(1) 先進的な授業を継続して実践している、豊かな教職経験を有する教師による授業

- ・実施時期 2013年2月
- ・対象 三重県立津西高校2年生
- ・授業者 澤口哲弥(同校教諭)
- ・教材 「想像としての現実」(若林幹夫)

本研究において、この授業は、実践の到達点の把握とモデルの仮説的導出に資する先進的な授業として位置づけられる。全5時間の授業では、概ね次のような学習が行われた。(以下の～は、学習指導案の記述に添いつつ、それをまとめたものである。)

筆者が「一般的にそう思われている」と考えていることを推論し、論点と主張の組み合わせを考える。

論拠をとらえ筆者の意図について考えることを通じて、論拠を仕立てていく筆者の構想を推論する。

論証を吟味する。

他の事例と関連付けて、その類似性を論証する。論理的に両者の関連性、類似性を説明する。

筆者の論証に関してレトリックを批評する。

この一連の過程では、筆者に寄り添うところから始まり(～)その上で読者の立場から批評が行われている(～)。ただし、～は筆者と類似の経験を学習者に求めているものでもあり、この活動においては筆者の立場と読者の立場の往還が行われると考えられる。

また、この授業では立場性の意識化が図られている。たとえば～において、次のような学習が行われている。(引用は学習指導案の記述による。)

参考資料としてさまざまな地図を集めたプリントを配布し、それらがどのような立場から何を目的に作られた地図であるかを考え、「現実」が唯一のものではないことに気付かせる。

また、立場の往還を実現させるという点においても、様々な手立てが講じられている。

自己以外の立場から論証を構築するといった行為はたとえばPISAにも見られるが、授業者はそうした営みを実現させるための重層的な手立てを用意していたといえよう。

では、他の事例と関連付けて類似性を論証するためのワークシートが用意され、具体例の提示(関連付け) 論拠の整理(類似性の指摘とベン図による確認) 説明(文章化)といった過程を経る学習が成立するように促されている。また、授業者自身も「写真」を具体例として挙げ、それが具体例としてふさわしい理由を述べている。つまり、この授業において学習者は、筆者、読者である自己、そして別の読者である教師といった複数の立場を行き来しながら、表現を行っている。その過程では、自らが具体例を導出するために、教材を改めて読解して筆者の認識を再確認する必要もある。ここに、複数の立場を往還することによる理解と表現の関連型学力モデルを描き出すことができる。また、そうした往還を実現するためには立場性の意識化が前提として必要であることから、立場性の意識化、そして立場の往還という授業モデルを想定することも可能であろう。

(2) 既存の授業を乗り越えた新たな実践の創造に意識が向けられている、中堅の教師による授業

- ・実施時期 2014年2月
- ・対象 私立暁高校2年生
- ・授業者 矢倉真宏(同校教諭)
- ・教材 「未知へ向けての信号」(武満徹)

本研究において、この授業は、上記(1)の授業等をふまえて仮説的に構築したモデルに応じた、実験的な授業として位置づけられる。この授業は1時間で行われた。そこでの学習の過程を以下に記す。

教材本文を読む。

レトリックを分析することで、本文全体を読解する。

筆者の認識・思考や表現と、自己の周囲における事象あるいは既読のテキストとを関連付ける。

一つの教材に多くの時間を割り当てず、あえて短時間で読了させることを目指した実践であるが、その分、学習は焦点が絞られたものとなっている。学習過程の～では、レトリックの分析が行われており、これは読者の立場から筆者の表現行為を批評することに結びつくものである。そこでは、特に比喻表現に対する焦点化が図られている。学習指導案には、次のように記されている。

比喻表現や対比などに気付き、比喻ならばどのような比喻が用いられているか、対比ならば何と何が比べられているかを確認する。

ただし、この授業は、そうしたレトリックの指摘に終わっていない。学習指導案の記述によれば、「それらの比喻が『何をさしているのか』ではなく、そのように考えるようになったきっかけを本文から探す。」とある。つまり、それをレトリックとして認識した読者としての自己をとらえ直しながら、レトリックがレトリックとして成立していることの論証を求めているのである。

さらに本授業では、において、他の事例との関連付けが求められている。特にここでは既読テキストの想起も求められている。授業者は多読も重視した授業を行っている。(本授業で教材を1時間で読ませたのもそれを意識してのことである。)そのため学習者はこれまでに多くの説明的文章教材を読んできており、ここでそうした多読の成果が表れる。いずれにしても、これは先に示した(1)の授業におけると同じように、筆者と類似の経験を学習者に求めているものでもあり、この活動においては筆者の立場と読者の立場の往還が行われると考えられる。ここに、立場の往還を求める授業モデルの具現化を見ることができる。以下に、そうした往還に学習者を誘う問いを、学習指導案の記述より引用する。(「・・・」は引用の省略を表す。)

・・・「他者の眼で私たちが生まれ育った地域の文化を、その内から、見ることができる」というようなことは他にないか。・・・「自立した自由な人間になるために」ということは、武満は、今は「自立した自由な人間」になっていないと考えている。どういったところに自由ではないと感じているのか。わたしたちは何かを自由に評価・理解しようとしながらも、自由にはできていない。そういったことは身のまわりで起きていないだろうか。

(3)国語科授業の改善に課題意識を持つ、初任に近い教師による授業

- ・実施時期 2015年2～3月
- ・対象 三重県立四日市商業高校1年生
- ・授業者 奥田義経(同校教諭)
- ・教材 「水の東西」(山崎正和)

本研究において、この授業は、モデルの有効性の検証を意図した授業として位置づけられる。

全8時間で行われた本授業の学習過程の概略は、以下の通りである。

文章全体から、筆者の立場、論点、主張を把握する。

各段落の内容を読解する。

「東西」の枠組みで事象を認識し表現する。

インタビュー調査によると、授業者は教職歴2年目であり、初任時より(1)の授業を行

った教師に学び、関連型国語学力・授業モデルに接している。そしてその中で、高校における説明的文章指導では立場性に留意することが重要であるとの認識を得ている。この授業でも、で筆者の立場に留意しつつ、では、(1)や(2)の授業と同じように、筆者と類似の経験を学習者に求めて、筆者の立場と読者の立場の往還を追求している。また本実践における学習者の記述についても、「(取り上げた二つの物事の)違いを説明するにとどまる生徒の記述が多い」といった分析を行っており、そうしたとらえ方にも、立場性への意識がうかがえる。この授業は、立場性の意識化と立場の往還を企図した授業モデルに基づくものである。そのような授業において、初任に近い授業者でも、学習者の記述の限界を把握している。説明的文章を読むことの授業におけるそうした教師の認識は、今後の学習者の学力形成、とりわけ理解と表現が関連付けられた学力の育成に資することが期待される。この点に、本研究において明らかにした立場性の意識化と立場の往還による、理解と表現の関連型学力育成の可能性が拓かれ、また授業モデルとしての有効性が示唆されるのである。学力形成と授業改善という二つの観点から見て、本研究で追究した関連型国語学力および授業モデルは効果的であると考えられる。

ただし、本授業においては、授業者がレトリックについての知見を持っている一方で、レトリックへの学習者の着目は希薄である。1年生を対象とした実践である点において(1)や(2)の授業のようなレトリック批評あるいはレトリック分析は難しいが、レトリックへの着眼はさらに必要であろう。学習者に立場性を意識させたり立場を往還させたりする際に、教師が持つレトリックの知見をいかに導入するのか、その方法を一般化することについては、本研究では具体的かつ詳細に提案するに至らなかった。今後の検討課題としたい。

本研究では、上記(1)～(3)の授業とその分析を経て、立場性の意識化と立場の往還によって成り立つ、理解と表現の関連型学力と授業モデルを構築し、教師およびその授業実践に対する有効性を検証した。これは、後期中等教育における理解と表現の関連型国語学力が明らかになっていないという状況の改善を促すものでもある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

守田庸一、レトリックに焦点化した説明的文章の授業 - 教材における予弁法に着目して -、語り合う文学教育、査読無、13号、2015、18-25

間瀬茂夫、高等学校における高次読解力の評価のあり方 - 読解力評価問題の活用 -、国語教育研究、査読無、56号、2015、219-230

宮本浩治、問いを形成する説明的文章を読むことの授業づくり、国語教育研究、査読無、56号、2015、96-105

守田庸一、説明文教材の冒頭を読む、語り合う文学教育、査読無、12号、2014、34-40

守田庸一・奥知子、読むことにおける自己への眼差し、国語科年報・思草、査読無、8号、2014、1-11

間瀬茂夫、中学校で、評論(説明的文章)を、なぜ読ませるのか、日本語学、査読無、32巻15号、2013、4-12

間瀬茂夫、説明的文章の学習指導における二つの転換の意味、学校教育、査読無、1156号、2013、6-11

守田庸一、評論・論説教材の関連性に関する考察、三重大学教育学部研究紀要、査読無、64巻、2013、149-157

守田庸一、小学校から高等学校までを見通した説明的文章指導の必要性、語り合う文学教育、査読無、11号、2013、34-40

間瀬茂夫、国語科授業実践における学習の段階性の再検討、国語教育研究、査読無、54号、2013、103-108

[学会発表](計9件)

間瀬茂夫・守田庸一・宮本浩治、高等学校における評論の読みの学力評価 - 学力調査による分析 -、第127回全国大学国語教育学会、2014年11月8日、筑波大学(茨城県・つくば市)

守田庸一・宮本浩治・幾田伸司・辻村敬三・植山俊宏・櫻本明美・三浦和尚、説明的文章教材観の再検討 - 「生き物は円柱形」をもとに -、第126回全国大学国語教育学会、2014年5月17日、愛知県産業労働センター(愛知県・名古屋市)

宮本浩治、評論文学習指導の課題 - 授業構想に関する意識調査、及び読むことの実態調査を通じて -、第16回日本教育実践学会、2013年11月3日、岡山大学(岡山県・岡山市)

間瀬茂夫、説明的文章教材における歴史的説明と主張、第65回中国四国教育学会、2013年11月2日、高知工科大学(高知県・香美市)

[図書](計5件)

吉田裕久・守田庸一・間瀬茂夫・宮本浩治 他、溪水社、国語教育学研究の創成と展開、2015、534(229-242、243-252、357-366)掲載確定

山元隆春・守田庸一・間瀬茂夫・宮本浩治 他、協同出版、中等国語教育、2014、422(14-31、195-209、375-393)

位藤紀美子・守田庸一・間瀬茂夫・宮本浩治 他、世界思想社、言語コミュニケーション能力を育てる - 発達調査をふまえた国語教育実践の開発 -、2014、320(12-29、52-66、241-248、264-284)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守田 庸一 (MORITA, Yoichi)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：60325305

(2) 研究分担者

間瀬 茂夫 (MASE, Shigeo)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：90274274

宮本 浩治 (MIYAMOTO, Koji)

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：30583207

(4) 研究協力者

澤口 哲弥 (SAWAGUCHI, Tetsuya)

矢倉 真宏 (YAGURA, Masahiro)

奥田 義経 (OKUDA, Yoshinori)